

フランス語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

2024（令和6）年度共通テストの「フランス語」は、2020年度まで実施されたセンター試験の枠組みを受け継いだ2021年度からの「共通テスト」を踏襲し、『筆記』試験を課し、リスニングテストは実施しないという方針の下、作成、実施された。

共通テストになって4年目の今回のテスト結果は、受験者90名（前年度93名）、平均得点は100点満点換算で62.68点（同65.86点）、最高100点、最低13点（同100点、20点）であった。一昨年度の平均点『「センター試験」を含めて過去最低』を上回ったが、今年度の教科間比較としては、英語をのぞく4つの外国語の中では最低点であり、依然としてセンター試験時代のレベルではない。（センター試験最後の5年間の、フランス語平均点の平均を算出すると70.55点になる。）

出題形式については、昨年度のそれを踏襲している。第1問は発音問題、第2問は「書換え」問題、第3問は文法問題、第4問は語彙の知識を問う問題、第5問は対話文完成問題、第6問は整序作文問題である。第7問は資料読み取り問題でA、Bに分かれての出題形式であり、いずれも実際の運用場面を想定した問題である。第8問は読解力が問われる長文問題である。

今年度のフランス語共通テストは、基本事項を丁寧に問う工夫のある問題で、発音、語形変化における不規則なものについても、おおむね中等教育レベル内から出題された。またフランス語の運用能力を幅広く問うという点でも、共通テストのねらいを体現した出題であったと評価できる。

報告の方針

今回の報告は、上記の点を踏まえ、次の4点を分析の中心とする。

- (1) 受験者の実力差を判定できる試験となっていたか。知識があり、深く考えた結果、不正解になってしまうことがないか、ということを中心に検討したい。少人数の集団が対象であるだけに、その点に関しては大人数の科目以上に要求が強くなるが、御理解を賜りたい。
- (2) 特定の要素に偏らない、総合的な学力を問う問題であったか。
- (3) 高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか。
- (4) フランス語圏滞在経験などが解答の可否に大きく影響していないか。

なお、評価に当たっては、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

フランス語を高等学校から選択学習する高校生の学習環境を考慮した問題作成を希望している。主な形式と内容は共に昨年度の共通テストを踏襲したものであった。

第1問 フランス語におけるつづり字と発音間の規則性を理解しているかを問う問題である。今回も基本ルールを問う問題に限られ、こうした傾向が続くことを望む。

問1 語中の -e- の音を問う問題。③femme がルールから外れることが問われたが、出題語はどれも基本語である

問2 子音の組合せ ch- の発音を問う問題。正答率もよい。

問3 発音しない子音 -m- を問う問題。

問4 発音する子音 -z- を問う問題で、基本語からの出題だった。

問5 リエゾンを扱う枠である。正解の①un certain âge が鼻母音でなくなるリエゾン、とい

う難易度の高い出題だったが、正解以外の選択肢の、形容詞＋名詞はリエゾンしないの基本ルールを見定められれば解答できる問題でもあった。一方、③un pain au chocolat, ④un train expressの出題が、仏語圏の滞在の有無が解答の可否に影響するのではないか。

第2問 派生語の知識、動詞の活用、語形変化、などを扱う単語レベルでの総合的な文法問題である。

問1 形容詞から副詞への例外変化を問う(énorme - énormément), 高校生として難しいレベルの問題。

問2 動詞から名詞への変化を問うもの。基本問題である。

問3 動詞の過去分詞から不定詞を問う、新しい傾向の出題。基本問題である。

問4 名詞から形容詞への派生関係を問う問題。

問5 動詞から形容詞への変化を問う問題で、どちらも語形が大きく変化するところを出題された。正答率は大変低い。曖昧な知識に警鐘を鳴らす厳しい出題だった。

第3問 文中の空所に適語を入れる形式で、文法や語法の理解度を測る問題である。

問2 前置詞を問う問題。直前の語に引っ張られず、文全体を見られれば難しくない。

問3 冠詞あるいは所有形容詞を問う問題で、初級文法で扱うものだが、正解③leurに至るのは決して簡単ではない。

問4 la remarque, causer, le conflitなどの語彙をつかめていないと、出題の時制選択の判断が難しい。語彙力と文法力をみる良問であった。

問5 前置詞を伴う関係代名詞を問う、難易度の高い問題。

問7 関係代名詞dontの用法では学習の流れでは後半に来ると思われる用法で、難易度は高いが、選択肢の工夫もあって、正答率は5割ほどにとどまった。

第4問 引き続き、文中の空所に適語を入れる第3問と同じ形式。語彙の理解度を測る問題に特化している。

問1 語彙問題であるが、意味だけでなく、続く「de 名詞」の形からも判断を促す良問。

問2 「順番待ちの列」を表すune _____ d'attenteの空欄の選択肢が, corde, file, ligne, rangéeで、どれも可能性があるように見えて選ぶのは大変難しい。正答率は最も低い。

問3 副詞を選ばせる問題だが、正答を選ぶのは難しくない。

問4 動詞を選ばせる問題で、選択肢は平易なものであるが、物主語の文に慣れていないと戸惑う問題である。

問5 au _____ de ~の熟語を問うもの。問2とは違って、その選択肢同士は意味が大きく異なり、au lieu de, au milieu de, au point de, au risque deはどれも重要語句で、全体を見て選択させる良問。

問6 「病気なので彼をそっとしておく」の全体の意味は取りやすいが、空欄の動詞を選ぶのは難しい。「動詞 qn en + 無冠詞名詞」の構文の形は、幾つかの動詞でよくある形式だからである。出題の「動詞 qn en paix」について、選択肢の中でもlaisserが「最も適当」と判断するのは、大変難しいと思う。正答率は低い。

第5問 対話を完成させる問題であり、4技能の総合的な育成が求められている中で、会話体の出題にもますます工夫がされていることと推察する。

問1 会話の内容でシチュエーションを特定させるやや珍しい傾向の出題。un bouquet とune fleuristeを結び付けられれば、正答に行き着く。

問2 応答文 Tout à fait ! 直前の対話文を選択する際に、正解文がネガティブな受け答えであるところ、また条件法を使用しているところに、判断しにくさがあった。正答率は大変低い。

問3 au téléphone と appeler を結び付けられれば、正解に至る。選択肢も現在形と過去形があり、工夫がみられた。

問5 最後のせりふまできちんと読むことで正答に行き着く。使われている単語も、状況設定も理解しやすい。

第6問 整序作文。和文仏訳で、自らの考えを述べる自由作文の前段階として、文法や構文を中心とした作文力を問う問題である。並べ替えの語(句)の単位は6個、問うのは4番目の語(句)というルールで統一されている。日本語とフランス語の間の発想の違いが問題のポイントになると難易度が上がる。文頭と最後がフランス語で示されることで、出題ポイントがはっきりするこの形式の継続を望む。

問1 「彼は」で始まる日本語に引きずられず非人称構文を作文するという判断や、lui の位置がポイントとなる。

問2 条件法、比較表現、siを使わない仮定表現、程度を表す副詞 un peu と数量の比較 plus de ~ の語順、などポイントは複数あり難易度が高くなった。正答率も低く、よく考えられた問題であるとはいえ難しい。

問4 出題の「風邪をひかないように」の日本語を、提示のフランス語で「風邪をひくのを恐れて」= de peur d'attraper un rhume と組み立て直すのが苦手な生徒には難しい。

問5 シンプルな文だが、迷う要素がいろいろあって、良問である。

第7問 情報処理能力を問う問題で、与えられた情報から判断し発信できるかが問われている。今年度はA「電動アシスト自転車の取扱説明書」、B「観光協会提供のスキープランの案内」が主題に取り上げられていて、実生活に直結する話題として受験者にとって取り組みがいのあるものであった。

A 資料の Code d'erreur の10には charger, 12に changer と似ている語を配しているのも、要注意である。

問1 会話文の空所補充。[a]については、調整画面の部位ごとに示す内容と自転車の取扱説明書との関係が読み取れるかどうか、[b]については、アシストの強弱についての記述を読み取れるかが問われた。設問は en haut à droite などの読み取りをていねいに行うことで、解答できる。

問2 「エラーコード11=システムエラー」であり、その際は説明書にある Éteindre, puis allumer de nouveauするべきとある。これが正解の③ éteindre et remettre le système en marche と同義「スイッチを切ってまた入れ直す」であることを問う問いは語彙の把握・表現力を計る良問である。

B問2 子供料金、サンタクロースに会えること、スキー場Cを読み取れば、計算間違いしなにかぎりは難解ではない。

問3 バスで行く場所として[a]は温泉ではないこと、息子だけが受け取れる[b]は子供向けプレゼントである、と読み取るのは難しくない。リフト券は全員もれなく受け取れるものだが、こちらを選んでしまったのか正答率は良くない。

問4 ③が正解となるのは確かなのだが、②「ミシェルはスキー場Aとスキー場Bの間を歩かなければならなかった」は誤答かどうか、明確でない。絵図にある矢印の意味もあいまいである。いずれにしても上から順番に読む中で②が正答と早合点せずに、「最も適当」かどうか読み進める必要がある。

第8問 文意を捉えられているかの理解レベルを細かく測れる長文読解問題である。今年度はテレワークを主題としたエッセイである。時代に即した素材であり、経験に基づく知識も読解を

助けた面があるだろう。長所・短所、またそれへの対応策について明確に整理された形のテキストであった。

問1 **a**は続きを読み進められればcontre leでないことがわかるし、**b**は経験からmieuxを選べるはずだ。ただ、使用している語les argumentsやen faveur de ~は易しくない。

問2 長所の2つ目②「移動時間の節約」は、他の選択肢がテーマからずれていることから選択は容易で、力を計る問題として良問である。

問3 tenir compte de という動詞が導きの糸となって、内容把握に至る。

問5 文をつなぐ語を問う問題。各段落の構成は論理的で、適切な語を考えさせる良問。前後の流れの中にも散見される他の接続詞句が使用される様子も、取り組みながら学ぶ機会になった。

問6 前向きな論調に変化するこの場面で③moyensを選択するのは難しくないが、直後にあるlimiterの意味をとらえられないと逆の流れに読み違える。

問7 内容一致問題。よくできた選択肢で、部分ごとの読解を確認するものになっている。物主語の文など冷静に読み取ることが大事で、経験に基づく思い込みにも注意したい。

問8 「本文全体」のタイトルという点がポイントで、一部の内容を強調するだけでは十分とは言えない。ただ、正解は③「現代世界におけるテレワーク」という広範囲にわたるもので、読み込みすぎて別選択肢を選んでしまう可能性があるかもしれない。

3 分量・程度

例年どおりの分量、程度であるが、懸念すべき点もある。第3問問7において、関係代名詞dontが出題されたが、用法としてはもっと基本的なものを問うべきではないか。また後述もするが、第4問問2や問6の出題のような選択肢が迷いを高じさせるような出題は、共通テストにはそぐわない。このような、基本語の応用的な側面を問うことは、共通テストの目指すべきレベルを超えるものであり、こうした傾向が定着することを恐れる。

4 表現・形式

「語彙・熟語・ルールを知らない」と解答できない場合も、不正解の選択肢のおかげで正答に導かれることがある。第1問問5のリエゾンを問う問題で、正解の①は鼻母音でなくなるリエゾンの発音を問われると難題だが、他の選択肢が、「名詞+形容詞の語順ではリエゾンしない」、の基本ルールに即して正解への道がカバーされる問題でもあった。また、第3問問7のdontを答えるもの、第8問問7内容と一致するものを選ぶ問題なども、不正解の選択肢がよくできていて、読み込むことで正解に至る可能性が広がると思う。取り組むことが学習の機会になる好例である。

しかし、そのような読み込みは関係なく、「この語彙・熟語・ルールを知らない」と解答できないものを問う出題について、特に以下の3つを挙げる。① 第4問問2「順番待ちの列」の表現を①une corde de ②une file de ③une ligne de ④une rangée de から選ばせるもの、② 第4問問5 au ____ de ~の熟語を問うもの。選択肢は①au lieu de、②au milieu de、③au point de、④au risque de。③ 第4問問6「動詞+直接目的語+en paix」の構文で、ふさわしい動詞を①faisons、②laissons、③mettons、④prenons、の中から選ばせるもの、である。いずれも第4問で、語彙表現を問うものとして欠かすことはできないとはいえ、①や③については、共通テストで要求することなのか疑問に思った。②の選択肢はどれも重要語句で、それぞれの意味も大きく異なるし、全体を見て選択させる良問である。だが、①や③については、誤答であってもおおむね意味は通じる可能性のある選択肢があり、最適なものの中から選ばせる難問であった。ある程度の実力があり、考えすぎる

ことで間違える可能性を危惧する。報告の方針(1) 受験者の実力差を判定できる試験となっていたか。知識があり、深く考えた結果、不正解になってしまうことがないか、及び(3) 高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか、に抵触しかねないものとする。

5 ま と め (総括的な評価)

全体として、従来通りの出題方針を踏まえており、基本的な問題、例外を扱う問題、応用力を必要とする問題、読解力を必要とする問題がバランス良く配置され、大問の配列も、語彙から文章の読解へと問題の漸進性に配慮したものが踏襲された。問われている知識も従来出題範囲を大きく逸脱するものはなく、受験者を戸惑わせる問題も少なかった。

その上で、今後の出題に関して以下の点に御考慮をお願いしたい。

第1問問5の①、②は従来通り、リエゾンの有無のルールを踏まえれば違いを理解できるが、③、④はそれぞれの語句を耳にしたことがあるかどうかの経験に左右される可能性のある選択肢といえる。これは、報告の方針(4)に照らして疑問なしとしない。発音上のルールのみで正答にたどり着ける問題作成をお願いしたい。

第2問問1は形容詞を副詞化する問題であるが、ここで例外が2箇所に見られる。ここで問われている変化形énormémentと③évidemmentである。例外が2つになると問題が一段、難化する。例外の使用は各問題につき1つに絞っていただきたい。

第4問問2は名詞の用法の違いを問うというよりは、file d'attenteという言い回しを知っているかどうかという問題といえる。報告の方針(4)の観点から、フランス語圏滞在経験の有無が影響する可能性のある問題は避けていただきたい。第4問問6は大変よく練られた問題であるが、③が選べない理由を求めるのは高等学校レベルを超えるのではないか。「最も適当なもの」を選ぶ必要のあるマークセンスの問題だから成立するとはいえ、やはり共通テストとしては難問である。報告の方針(1) 受験者の実力差を判定できる試験となっていたか。知識があり、深く考えた結果、不正解になってしまうことがないか、及び(3) 高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか、に抵触しかねないものとする。

以上の点を踏まえていただき、今後も良問が出題されることを期待する。受験者数が多くないにもかかわらずこのような適切な問題を作ってください問題作成部会の方々に感謝申し上げます。

さて、今回も事細かな指摘や要望を申し上げたが、その理由はやはり、英語以外の外国語とそれを選択した高校生が置かれた環境にある。フランス語を第一外国語として選択する高校生は、英語と比べて受験機会が少ないというリスクを負っている。種々の事情ゆえに独自入試からフランス語をなくすとしても、代わりに共通テスト利用を可能とする、という大学が増えてほしいと常々思っているが、実際は残念ながら多くない。ここ数年のフランス語受験者の減少の理由は、この大学入試科目としてのフランス語の不安定さが大きい。特に、今年の高등학교3年生世代が外国語選択について深く考える3-5年前の時期は、ちょうど新しい共通テストの指針が論議されていた時期であり、しかも複数科目でその指針が揺れ動く不安定な時期であった。英語以外の外国語については、その存続さえもなかなか発表されなかったことも大きい。高校生活を目前にする中で、安心してフランス語を選択できるどころではなかったのである。正にこうした状況が、フランス語を第一外国語に選択する高校生の減少を引き起こしたと考える。

それでも、フランス語で受験可能な大学には、私大、国公立大学とも歴史と伝統を備え魅力的な大学が多く、だからこそ、困難を排してそうした大学を目指す高校生が一定数いるわけである。共通テスト利用の大学が増えていくことで、フランス語選択者数及び受験者数の増加に必ずつながる。

またそうした大学は、難関大学と称されるレベルであることが多いが、この狭き門を目指すフラ

ンス語選択者にとって、共通テストは、一部の私大受験においては外国語受験のすべてであり、国公立大受験においては、いわゆる「門前払い」を受けないために、かなりの得点が必要となる重要な試験ということになる。

前述の「例外を選択肢では2つ使わないでほしい」という要望は、このように共通テストの持つ意味合いがフランス語受験者にとっては英語以上に重いという事情から生じるものである。文法問題で、例外を問われることは避けられない。しかし、同時に例外を2つ以上組み合わせて問われると、一段、問題は難化する。これは共通テストが求めるべきレベルから逸脱すると言わざるを得ず、飛躍するようであるが、将来、フランス語を選択しようとする高校生の意欲をそぐことにもつながりかねない。高等学校の現場にいる者としての実感である。これは、共通テストのレベル低下を希望しているということではなく、一定レベルの維持を保ちながらも、基本を問う姿勢を続けていただきたいということである。過去問を参考にされつつ、毎年、新たなアイデアを盛り込むことは大変な労力を必要とするであろうことは想像に難くない。けれども、わずかなレベルアップも、受験者にとっては大きな壁となることを御理解いただきたい。

あえて大きなリスクを負ってまで、フランス語を選択する高校生にはユニークな生徒が多い、というのも中等教育教員としての実感である。彼らは、受験機会の少なさに加えて、私塾も少なく、受験参考書も限られている環境で日々努力している。何が彼らを支えているのか。彼らがフランス語を選択する理由は、英語に加えてもう一つの外国語を学びたいという意欲があるからであり、それによって独自性を身に付けたいという意志があるからであり、さらに、将来的にも、多様な働き方、生き方を志向したいということにある。

こうした高い意識を持ち合わせる高校生は、周りの友人たちにとって刺激的な存在であるだけでなく、大学に入ってからでも活力をもたらす存在となるに違いない。ひいては、その多様な生き方が社会全体に変革をもたらすことが期待される。フランスのエリートと呼ばれる人々においては、きちんとしたフランス語という文化資本を身に付けることは、豊かな人生につながるという意識が共有されているらしい。フランス語を学ぶ日本の高校生にも、豊かな未来が待っているはずである。そのためにも、フランス語共通テストを利用する大学が増えることを切に願う。